

学生参加による企画と演出を活かしたオンデマンド講義の事例研究

A Case Study of On-Demand Lectures Utilizing Student-Led Planning and Production

小柳和喜雄（関西大学総合情報学部）

科瑠（関西大学大学院総合情報学研究科）

Wakio Oyanagi (Kansai University, Faculty of Informatics)

Yao Ke (Kansai University, Graduate School of Informatics)

要旨

本研究は、COVID-19 下で実施されたオンデマンド講義「メディア表現論」における学生 (SA/TA) の関与と、その教育的意義を検討したものである。授業では、教員・学生スタッフ・受講生が協働し、動画教材の制作や出演、LMS を用いた交流を行った。2020・2021 年度の授業評価コメントと LMS 上の自由記述をコード化し分析した結果、学生 (SA/TA) の関与は「教員との距離感の縮小」「親しみやすい学習環境の形成」「編集技術や表現力のモデル提示」として受講生に肯定的に受けとめられた。一方で、教員不在感や学生 (SA/TA) の負担の大きさといった課題も指摘された。動画構成や題材の工夫は学習意欲を高め、学生の創作意識を喚起する効果を持つことが示唆された。本事例は、学生 (SA/TA) が教育参加者として機能するオンデマンド授業の可能性と課題を明らかにし、高等教育における教育方法改善への示唆を与えるものである。

キーワード オンデマンド講義、学生参加、事例研究 / **On-Demand Lectures, Student-Led, Case Study**

1. はじめに

学生が Student Assistant や Teaching Assistant (以下 SA/TA と表現) として授業の運営に参加することの意味や意義、その役割や講義に及ぼす影響については、かなり以前から語られてきた。例えば、全学導入事例 (関西大学) として、教員の 89% が SA 活用に満足し、それが授業内容・方法の改善に資する一方、SA のスキルにばらつきや引継ぎの課題があることを可視化した論文として岩崎他 (2008) がある。また受講生インタビューから、SA には「議論支援」「プロジェクト知識・技術」「学生だからこその立場」「支援タイミングの見極め」が求められることを明らかにした時任 (2017) があげられる。TA と学習環境とのかかわりに目を向けた研究として、アクティブラーニング教室における学生による人的サポート (テクニカル TA) の必要性和効果を整理した中

澤・福山 (2015) や技術×TA 運用の例として、取り組みの可視化、意識化により支援の質を上げる仕組みを提示した江木他 (2021) と今村他 (2022) などがあげられる。

対面講義だけでなくオンラインを用いた講義における TA と関わる研究も進められてきた。COVID-19 といったパンデミックの中で、その必要性から多くの講義でオンデマンド講義などが行われた。その中で、受講生の安心安全や学びに寄り添い、提供動画に関心を持たせ、非対面でありながら協同的な学びを感じさせていく試みが検討された。例えば、大規模遠隔で TA の役割設定 (運営補助・技術支援) の重要性を実践的に報告した鈴木 (2020)、学生間での密なコミュニケーションを損なうことなく授業を展開することへの TA の効果を見た松澤他 (2022)、PBL での TA 支援がエンゲージメントに寄与したことを述べ、2020 年

ハイブリッドで行った授業の授業評価の全項目が上昇したことを述べた筆内他 (2022)、講師単独より TA が関与する対話型映像が受講生に好評であり、学習者の受容・理解促進につながることに意図した森田・向後 (2022) がある。

そして、SA/TA を経験した学生がどのようなものを身につけていったか、その成長等に関心を向けた研究、それを活かした実践に言及している研究として、中谷他 (2023)、筆内他 (2024)、科・久保田 (2024) の研究がある。

また COVID-19 の収束後、オンライン授業などが大学で少なくなっている今、あらためてオンデマンド講義について振り返り、オンデマンド講義映像と学習活動に関するデザインの関係を問い、今後の展開として講義映像を活用した反転授業の可能性を検討している研究として岩崎他 (2025) がある。

しかし、学生 (SA/TA) がオンデマンド講義の動画の作成だけでなく、そこに出演し、講師役を務め、質問に応えたり、励ましを行い、講義の運営にも関与する取り組みは稀である。先に取り上げた森田・向後 (2022) で関心が向けられている他、実践研究であまり見られない。講義は基本教員が行うという前提に立つなら、オンデマンド講義でこのような取り組みは通常ないからかもしれない。2025年3月までに CiNii、J-STAGE で公表されている TA や SA に言及する研究報告や論文を調べても、学生 (SA/TA) が大きな役割を果たす学生参画の講義の取り組みや複数年に渡って継続的に検討する研究は確認できなかった。

そのため、あらためて、2020年度に COVID-19 の中ではじめてオンデマンド授業に挑戦し、2021年度に前年度の振り返りをし、その結果を下にオンデマンド講義を行った「メディア表現論」について、未公表であったその取り組みの評価結果を、取り上げることにした。その理由は、そこで行っていた「学生 (SA/TA) がオンデマンド講義の運営に参加し、動画の作成やそこに出演する」工夫について、この事例が持つ意味、意義、課題といった視点から報告をすることは、この組みの独自

性からいって意味があると考えたからである。このような取り組み事例が持つ意味を記録として残しておくためであり、高等教育の高度化と関わる教育方法改善に何か貢献することを考えたからである。

そこで本研究は、「学生 (SA/TA) がオンデマンド講義の運営に参加し、動画の作成やそこに出演する」教育方法の工夫は、受講生にどのように受けとめられたか、その取り組みの評価に関心を向けて知見を明らかにすることを目的とする。なお、本講義の教育方法によって、どのような成果があったのか、つまり受講生に、このような取り組みをしたことによる学習成果 (成績、評定結果) はどうであったのが当然問われる。2年間続けた結果、毎回講義後に提出された課題の記述内容は、対面時の記述内容と比べて大きく学習成果が下がることは確認されず、オンデマンド講義においても一定学習成果の保障は可能であったため、COVID-19 といったパンデミック下において何かがその学習の支えとなり、学びを継続させていたのか、教育方法の工夫に関して目を向けることにした。

2. 「メディア表現論 (総合情報学部)」の概要

この講義は、専門選択科目 (2 回生以上を対象とした半期 2 単位科目) であり、通例 150 名~200 名が受講する。

講義は、「あるメディアに固有の情報表現と広くメディアに共通する情報表現に関する見方考え方や制作の手法について、理論と演習を通じた分析によって学ぶ。メディアで表現すると言うことの意味は何か。メディアは誰を意識して何をどのように表現しているのか。メディア作品の制作にはどのような人が関わっているのか。表現する上での倫理上の問題は何か。メディア表現を多様な視点から考察していく。視聴者の立場、作り手の立場からメディア制作の場を考え、作品を分析批評しながら作っていくことの意味を、理論と実践を通じて考えていく。そしてメディア制作にかかわる基礎的な知識の習得および批判的に映像を視聴

する力を培う。授業は、講義に加え、映像鑑賞、WWW 情報分析、グループ討議、発表など、さまざまな活動を行う予定である。学生自らが積極的に授業に参加する姿勢が大切である」とシラバスに記し、これらを目的、内容、方法にした。当時、オンデマンド講義で進めた 2020 年度と 2021 年度の流れは表 1 の通りであった。

そして、当時、受講生に最初に以下の内容を提示し、この授業は、教員と学生スタッフ (TA などの役割を担う人) とともに授業を展開する方法を

表 1. 全 15 回の講義

1 学期間の流れ

授業回	授業日	テーマ
1	4月5日	オリエンテーション
2	4月12日	セミドキュメンタリー
3	4月19日	映像の違い
4	4月26日	メディア制作の裏側
5	5月10日	見たくなる動画の法則
6	5月17日	フォトランゲージ
7	5月24日	ニュース
8	5月31日	記者会見
9	6月7日	カメラワーク
10	6月14日	広告分析
11	6月21日	広告制作
12	6月28日	編集
13	7月5日	ストーリー制作
14	7月12日	制作相談会
15	7月19日	まとめ

※授業内容は変更する可能性があります

➤ 目標

- 1 自分の考えを持ちメディアを批判的に見る力を身につける。
→他者の視点にたくさん触れる。(授業中の発表、関大 LMS の意見交換)
- 2 自主的に発信する力と積極的に協働する力を身につける。

➤ メディア表現論の特徴って？

1. チームティーチング制度 (TT 制度)
そもそもチームティーチングとは、複数の教員が役割を分担し、協力し合いながら指導計画を立て、指導する方式のことであり、チームの教員一人ひとりの特性を最大限に生かした体制のことを言います。この授業においては、一度メディア表現論を受講したことのある学生が先生とチームになり授業を行う TT 制度を取り入れています。先生と一緒に授業を行う学生たちのことを TT (Team Teacher) と呼びます。ややこしいですが制度名とは異なります。TT 制度を取り入れる理由は、メディア表現論を受ける皆さんがより自分の意見や質問などを言いやすい環境にするためであり、またその意見をできるだけ反映したいと思っています。
2. みんなで一緒に作る授業
この授業のコンセプトは「TT と受講生が協力して作る授業」です。私たちは現在の大学の授業でよく見られるが、教員による一方的な知識伝達型の授業は面白くないと考え、この授業では TT と受講生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら成長していく場にしてほしいと思っています。そこで、メディア表現論を履修するにあたって、授業を「受ける」という姿勢ではなく「一緒に作る」という姿勢で授業に臨んでほしいと思います。授業内外で共に成長していきましょう！！
3. アクティブラーニングを意識した授業
みなさんはアクティブラーニングという方法を知っていますか？アクティブラーニングとは、授業を聞くだけでなく、聞いて学んだことを生かして実際に自分でやってみて考える、意見を出し合ったり、などいろいろな活動を介してより深く分かるようになることを目指すものです。その背景として、社会に出た時に職場や地域社会などで多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力として、①前に踏み出す力②考え抜く力③チームで働く力が求められます。このような力を身につけるためには、きわめて活動的・実践的な学習形態が求められます。これらの力を養うために、この授業では受講生の積極的な授業参加を求めます。
4. メディアについて学ぶ授業
SNS などの普及に見られるように、現在社会において情報は以前より私たちにとって身近な存在となりました。その一方で身近になったが故の問題も起きています。情報をうまく活用するは単に受け取るだけでなく、自分の考えを元にその情報を吟味した上で受け取ること、そして発信することが重要です。さらにそのツールとなるメディアの特性を理解すること、メディアに合わせて自分自身を表現する力も必要なのです。これらの力を身につけるべくメディア表現論では様々な活動を通して「メディア」について学んでいきます。

TT (チームティーチング) と呼び、それを行う学生スタッフも TT「チームティーチャー」と呼び、受講生で作っていくことを説明した。つまり、この授業は、3 者で作っていくものであるため、学生スタッフ (TT) がオンデマンド講義の動画の作成だけでなく、そこに出演したり、質問に応えたり、励ましを行う講義の運営に関与する取り組みがあることを説明した。

3. オンデマンド講義の取り組みの評価の方法

ここでは 2 年間のこの取り組みに対する評価を学生の 2 種類の評価コメントから読み取ることにする。

1 つは、大学で実施している学生による授業後の授業評価コメント (自由記述) から、学生の声を読み解き評価する。2020 年度の取り組みと 2021 年度の取り組みに対して、無記名で記載されたものである。

もう 1 つは、①2020 年度に限ってのものであるが、LMS 上で受講生に依頼したアンケート内で「講義題材の工夫」「作成動画の工夫」「交流で活用する LMS や Google 等の活用の工夫」に対する学生のコメント、②2020 年度の結果を受けて改善を試みた 2021 年度の取り組み全体に対する受講生からの取り組みの評価を掲示板の書き込みコメントである。

投稿者の紐づけが可能となる LMS 上のアンケート機能を用いたものである。受講生にはあらかじめ授業改善に向けた研究に、皆さんの声を使わせてもらう協力依頼を行い、承諾を得たものを用いた。受講生が回答してくれた評価コメントを用いて、受講生でありながら講義と一緒に作っていく学生として、責任をもって、今後の授業に活かしていくコメントとして、どのように記載されているか、それを読み解こうとしている。

これを評価情報として取り上げる理由は以下の通りである。2020 年度春学期は、COVID-19 の影響下により、必然的にオンデマンド講義 (全 15 回) をはじめて行うことになった。そのため「動画作成」と「そこで取り上げる題材」、そしてその

画像コンテンツを通じて学生の意見交流を促すために用いる「コミュニケーションツール (LMS・Google document・スプレッドシート)」については、重要な課題となった。そこで学生スタッフ (TA など受講経験のある3回生1名と4回生2名) と協議を進め、月曜日の2時間目に設定されているこの授業に対して、毎週金曜日に次週の動画コンテンツの内容確認と進め方の打ち合わせを行い、毎週月曜日の夕方に、実施した講義の振り返りを行うことにした。

その取り組みの工夫は、どのように受講生に受けとめられたかを次の取り組みに向けて知る必要があったため、第15回目の講義の時、第2著者がLMSを用いたアンケート調査を作成し、受講生に回答への協力依頼を行った。しかし2021年度はこの結果を下に改善を考えたオンデマンド型講義であったため、このようなアンケートは行わず、2021年度の取り組みの評価は、LMSの掲示板を使って、第15回終了後、全体を通した授業の感想や意見などを、自由に回答してもらうように受講生に依頼した。

4. 結果

4.1. 2020年度と2021年度の授業評価の自由記述から読み取れる評価結果

2020年春学期オンデマンド講義「メディア表現論」の受講登録者169名中、「Q11.この授業の①良かったところ・②継続してほしいところ・③改善・提案できるのであれば入力してください。」

表2. 2020年度 (メディア表現論 春学期)

カテゴリー	割合 (%)
授業内容・教材が良い	20.70%
教員の教え方が良い	13.80%
TT・学生スタッフが良い	10.30%
学生参加・グループ活動が良い	13.80%
課題量・難易度への不満	13.80%
授業進行・形式への意見	17.20%
特に評価なし・その他	10.30%

取り、コード化を通してカテゴリに分類し、積算した結果を%で表したのが表2である。

全体傾向として、学生は「授業内容・教材」や「授業進行の形式」についてポジティブな評価をしている傾向がある一方で、課題の量や難易度に関しても一定の不満が見られた。そして学生スタッフやグループ活動への評価も一定数あり、学びの環境として評価されていた。

次に2021年春学期オンデマンド講義「メディア表現論」の受講登録者262名中、「Q11.この授業の①良かったところ・②継続してほしいところ・③改善、提案できるのであれば入力してください。」「Q12.その他」について、回答記述があった29名のコメント読み取り、コード化を通してカテゴリに分類した結果は表3の通りであった。

全体傾向として、コメント数自体は少なめながら、「授業内容が良かった」という評価と「課題量が多い/提出期間が短い」といった不満が二極化していた。そして学生スタッフ (2021年度は3回生3名と4回生3名の6名体制で行った) に対する受講生からの言及が多かったため、それを取り上げると、表4の傾向が見られた。

約2割の受講生が、「『TA、LAと一緒に作る授業』に対して、今回この授業を受講して、私は

表3. 2021年度 (メディア表現論 春学期)

カテゴリー	割合 (%)
授業内容・教材が良い	41.70%
TT・学生スタッフが良い	16.70%
課題量・難易度への不満	41.70%

表4. TTに関する評価(2021年度)

カテゴリー	割合 (%)
TTの存在感・一体感	21.40%
TTの技術・作業への評価	7.10%
TTに対する感謝・ねぎらい	3.60%
TTのサポートが良い	3.60%
その他・評価なし	64.30%

TAさんやLAさんが授業を行ってくれることで、他の授業よりも生徒と教師の距離が近くて、受けやすいと思いました」「一緒に授業を作っているという感じがしたので、1人で受けている寂しさは感じなかったです」「皆で一緒にやる形は良かった。ただ毎回の課題が多い」といった存在感・一体感について比較的好意的に評価していた。そして一部の学生は、撮影や編集などの技術的な支援や、感謝の気持ちを述べていた。

一方で、TAの技術・作業への評価として、「毎回TA・LAさんが私たちの授業のために撮影や編集を頑張ってくれているのが伝わってきて、こちらも課題を頑張る気持ちに戻そうと思えました」「いきなり編集ソフトを使った動画を作成しろと言われても説明なしには厳しかった。個人的には教師の説明のもと、授業を進めてほしかった」というコメントも見られた。「その他」として、「斬新で楽しい授業だと思いました」「身近に感じられて、オンライン授業の中でも1番楽しく学べた」なども見られたが、一方で、「高額な授業料を払っているからには、自分たちと同じ立場の生徒ではなく、その分野の専門的な知識を持った教授などに教わりたいというのが正直な感想です」というコメントも見られ、オンデマンド講義の場合、その映像に登場する語り手の登場時間がより明確になることもあり、学生スタッフがそれを多く務めることに好意的な反応を持つ学生と、講義なのだから教員がもっと登場して話すのを望んでいる学生もいることが明らかになった。

4.2. LMS上で受講生に依頼したアンケートの自由記述や掲示板投稿から読み取れる評価結果

ここでは、まず2020年度春学期にオンデマンド講義において重要な要と想定された「動画作成」と「そこで取り上げる題材」、そしてその画像コンテンツを通じて学生の意見交流を促すために用いる「コミュニケーションツール(LMS・Google document・スプレッドシート)」について、受講生はどのようにそれらの工夫を評価したか、その結果について報告する。

表5に示す通り、全体傾向としては、多くの学生が「TTの編集や演出、伝え方がよかった」と学生スタッフの動画作成の工夫を評価していた。たとえば、「受講生が楽しく授業を受けられるようこだわって、TTさんが動画を作ってくさっていたため」「毎回のTTさんの動画がyoutuber風で見やすかったから」「TTさんがわかりやすく伝えていたと思う」等の回答が見られた。また動画の見やすさについて、「短い動画の中でしっかりと学習できる構成になっているため」「テロップや字幕など見ていてわかりやすいと感じたから」「誰が見てもわかりやすいような工夫がされていると感じたから」等の回答傾向が見られた。

そして表6に示す通り、全体傾向として、学生の半数以上が、「身近なCMやドラマなどが題材で考えやすかった」といった「親しみやすさ」を高く評価していた。例えば「題材が身近・親しみやすい」と関わって、「ラストキスなど割と親しみの持てるものだった」「ドラマやCMを見たことあるものばかりで身近だったので考えやすかったです」。また内容の「面白さや題材の工夫」に触れていた。たとえば「映像も真面目な内容でありながら所々で面白いところもありよかったです」「私たちの興味を引くような編集の仕方や動画の作り方になっていたから」「興味深いものが多かったからです。授業中にラストキスを見ることになる」と

表5. 「2020 授業動画の工夫」へのコメント

カテゴリー	割合 (%)
TT・学生スタッフの工夫が良い	58.90%
動画のわかりやすさ・見やすさ	6.70%
その他・評価なし	34.40%

表6. 「2020 授業題材の工夫」へのコメント

カテゴリー	割合 (%)
題材が身近・親しみやすい	53.50%
題材が面白い・関心を持てる	9.00%
題材に工夫がある・新鮮	3.20%
その他・評価なし	34.20%

は思いませんでした。そして「題材に工夫がある・新鮮」として、「CMを通じたストーリー性や商品訴求の工夫を理解することができた。」「テロップや効果音、映像の構成がYouTubeみたいで見やすかった」「新しいことが多くあったから」等を理由としている回答が読み取れた。

また表7に示す通り、全体傾向として、「操作しにくい」「ツリー表示が見づらい」などに言及する声が見られた。例えば「多くの人を使うと重くなってしまったり、ワードなどと比べ打ち込むときに不便だと感じた」「ツリー表示にしないとどれが元の意見なのか見にくかった」「他の人の書きこみに影響を与えるのではと気がかりだった」などがあげられた。また「使用経験・慣れの不足」などが、「スプレッドシートを使うのが初めてだったので使い方が難しかった」「知らない間に消えていたり、保存されているか心配になった」等の回答から読み取れた。そして「機能・構造に対する意見」としては、「掲示板は個人の意見が見づらい作りで、コメントは見られても元意見は見えにくい」「Google スプレッドシートは名前で区別できるが、意見交換はしづらいと感じた」などがあげられていた。一方で、「改善提案・代替案」として、「掲示板か Google スプレッドシートのどちらか片方だけでも良かったと思います」といった意見も見られた。

次に、上記の受講生評価の「動画作成」と「そこで取り上げる題材」、そしてその画像コンテンツを通じて学生の意見交流を促すために用いる「コミュニケーションツール（LMS・Google document・スプレッドシート）」についての評価

表7. 「LMS等の利用」へのコメント

カテゴリー	割合 (%)
操作性への不満	8.30%
使用経験・慣れの不足	5.00%
機能・構造に対する意見	8.30%
改善提案・代替案	1.70%
その他・評価なし	76.70%

コメントを受けて、2021年度は、その改善を行った。2021年度のオンデマンド講義を受講生はどのように受けとめたか、その授業に関する最終コメント（自由記述）の結果を用いて報告する。

以下は、2021年度に実施された授業に対して、LMSの掲示板に投稿された学生の最終コメント（自由記述）を内容ごとにコード化（カテゴリー分類）し、その割合および代表的な意見を抽出したものである。受講登録262名のうち、232名が投稿をしていた。

表8に示す通り、全体傾向としては、学生の評価コメントの約1/4が「授業構成や内容のわかりやすさ・取り組みやすさ」に好意的な評価を示していた。そして「面白かった」「感謝」などの全体的な満足感を示す声も多く、授業の雰囲気良好だったことがうかがえた。映像編集や技術的工夫、課題を通じた学び、そして創作活動への影響まで、多様な側面に言及している点が特徴的であったことがあげられた。

具体的には、一番多かった「授業内容・構成が良い」に分類される評価コメントとして、例えば次のようなコメントがあげられる。「15回授業を受けて、どの回も取り組みやすい内容で、学んでいて勉強になりつつ、面白かったです。初めのラストキスの視聴分析から、今まで取り組んだ事のない変わった授業形態だと考えていましたが、最後の回まで毎回生徒にも飽きさせない授業スタイルで、楽しかったです。カメラワークや編集技術などたくさん学びましたが、これからその技術を

表8. 2021年度の授業に関する最終コメント

カテゴリー	割合 (%)
授業内容・構成が良い	27.30%
受講体験全体として面白かった／満足	19.30%
映像・動画編集・技術が良い	17.90%
課題・取り組みが学びにつながった	17.90%
課題量・負担が大きかった	7.90%
創作・表現活動に影響を受けた	7.60%
その他・特になし	2.10%

様々な場面で生かしていけるように頑張りたいです。ありがとうございました」「気づくと最後の授業と言うことで、振り返ってみれば本当に早かったなと思います。その中で様々なメディアの捉え方や、番組やCMができるまでの過程など様々なことを学ぶことができて本当に良かったです。TAさん、SAさんもお忙しい中、わかりやすく、メディアに対して興味を湧くような授業をありがとうございました。メディアに対して以前よりもかなり興味が湧くようになり、いろんな視点でメディアを捉えるようになりました。半年間ありがとうございました」「いろんな最終課題の動画を視聴し、すべて違った個性が出ていて面白かったです。ニュース番組は、似たような感じになるのではないかと思っていましたが、それぞれの作品に個性があり、観ていて飽きなかったです。大変だった分とてもやりがいを感じられる授業でした。ありがとうございました」。

次に多かった「受講体験全体として面白かった／満足」に分類される評価コメントについては、たとえば、「今まで表現などに注目したことがなくそういえばあの表現はこういう意図があったのかと日常の番組などを見る視点も変わり非常に楽しかったです」「メディア表現論を受けたことで、動画を見るときに制作側の工夫を探すようになり、自分自身の創作活動に生かせるようなポイントをいくつか見つけることが出来ました。また、他の受講生の動画を見ることで、自分にはない発想や動画の制作方法を知ることが出来て面白かったです。課題が多くて大変でしたが、その分たくさんのが学べました。ありがとうございました」などがあげられる。

続く「映像・動画編集・技術が良い」に分類される評価コメントとしては、例えば「最終課題、個性的なのが多いのに伝えたいことはしっかり伝わってきてすごかった。撮影・編集の技術が上手だからこそ成せたのかなと思った。メディア表現論では『みんなで動画制作するの楽しい』『納期は厳守』を身に染みて感じました TTさん達ありがとうございましたー！！」などがあげられる。

「課題・取り組みが学びにつながった」に分類される評価コメントとしては、例えば「メディア表現論を受けたことで、動画を見るときに制作側の工夫を探すようになり、自分自身の創作活動に生かせるようなポイントをいくつか見つけることが出来ました。また、他の受講生の動画を見ることで、自分にはない発想や動画の制作方法を知ることが出来て面白かったです。課題が多くて大変でしたが、その分たくさんのが学べました。ありがとうございました」などがあげられる。

「創作・表現活動に影響を受けた」に分類される評価コメントとしては、例えば、「今まで表現などに注目したことがなくそういえばあの表現はこういう意図があったのかと日常の番組などを見る視点も変わり非常に楽しかったです」があげられる。

一方で、「課題量・負担が大きかった」に分類される評価コメントとしては、例えば次のようなものがあげられる。「課題が大変な時もあったけど、学べたことも多くて良かったです」「いろんな最終課題の動画を視聴し、すべて違った個性が出ていて面白かったです。ニュース番組は、似たような感じになるのではないかと思っていましたが、それぞれの作品に個性があり、観ていて飽きなかったです。大変だった分とてもやりがいを感じられる授業でした。ありがとうございました」

5. 2年間の取り組み事例から得られた知見

5.1. 動画コンテンツの作成とその取扱い、そして学生スタッフ (TA 等) の参加と関わって

(1) 動画作成に 学生スタッフが関与することで受講生にもたらした意味・意義

①距離感の縮小と「共に学ぶ」感覚の創出：学生スタッフが授業映像に出演することで、教員との距離感が縮まり、一緒に学んでいるという感覚が生まれた。

②表現・技術のモデル提示：学生スタッフが動画内で例示する編集や演出の工夫が刺激となり、受講生自身の創作や課題への意欲向上につながっていた。

③楽しさ・見やすさの向上：親しみやすい構成やテンポの良い動画は、受講継続へのモチベーションを高めた。

(2) 学生スタッフ活用にオンデマンド講義のコンテンツ作成や運営に参加してもらう際の課題・懸念点

①学生スタッフの負担感：受講生には、学生スタッフが色々な場面で動画に登場し、課題提出など関わっても質問に即時に答えてくれるため、ありがたい反面、その大変さを感じていることが評価コメントからも読み取れた。学生スタッフがどのような役割を果たしているか、それをどのように学生スタッフが受け止めているかなど、受講生にも伝える必要がある。それがないと、その負担(かける時間他)や責任感の重さなどについて、受講生がそれぞれイメージすることがあるからである。それは次の学生スタッフになってみたいとする学生を遠ざけることにつながり(「私にはできない」という評価コメント等から)、後継者が育たず、取り組みが継続しない問題が危惧される(岩崎他(2008)の指摘と同様の課題)。

②教員不在感のリスク：学生主体の印象が強すぎると、教員の教育的関与が薄く見える可能性もある。

5.2. 高度化の取り組みと関わって

この度は「メディア表現論」という専門選択科目を対象としたオンデマンド講義に目を向け、そこでの動画作成の工夫や学生スタッフのかかわりなどを考察してきた。ここで報告した事例は、高度化の取り組みに向けてある情報の提供に位置づく。しかし当たり前なことではあるが、教育方法改善の取り組みは、科目の位置づけ(講義、演習、実習)(必須、選択)やその内容によって異なることに触れておきたい。

参考文献

江木啓訓・横山裕紀・今村瑠一郎・則常一輝(2021)「プログラミング演習のTAを対象とした行動記録システムの開発と実践」『日本教育工学会論

文誌』45(1),135-145.

筆内美砂・カッティング美紀・秦喜美恵・筒井久美子・平井達也(2022)「ハイブリッド(ハイフレックス)型授業を通じた多文化間共修の実践」『リメディアル教育研究』16, 103-114.

筆内美砂・カッティング美紀・鶴原利泰・筒井久美子(2024)「多文化間共修を支援するスチューデント・アシスタント(SA)の成長」『リメディアル教育学研究』19(1),71-82.

今村瑠一郎・照井佑季・上野真・江木啓訓(2022)「ティーチングアシスタントの学習支援状況を可視化するシステムの開発と実践」『日本教育工学会論文誌』46(1),203-215.

岩崎千晶・久保田賢一・水越敏行(2008)「組織的な教員支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題」『日本教育工学会論文誌』32(Suppl.),77-80.

岩崎千晶・宇治橋祐之・紺田広明・張曉紅・千葉美保子・脇田貴文・小柳和喜雄・黒上晴夫(2025)「オンデマンド授業における講義映像と学習活動のデザイン」『関西大学高等教育研究』16, 39-47.

科瑠・久保田真弓(2024)「大学の授業支援経験を通じた学生スタッフの自己形成」『日本教育工学会論文誌』48(2), 297-310.

松澤芳昭・落合祥希・齋藤敦輝・村田和義(2022)「オンライン上でのコンピューティング実習支援システム「CreCoSpeak」の開発と評価」『情報処理学会論文誌教育とコンピュータ(TCE)』8(1), 35-46.

森田健宏・向後千春(2022)「オンデマンド授業における対話型ビデオ教材の設計と実践—学生支援者の参画による相互性の向上—」『日本教育工学会研究報告集』22(2), 32-39.

中谷真也・笹川史絵・藤平愛美(2023)「オンライン・ハイブリッド授業におけるICT支援を通じたTAの学び—複数授業に対するTA活動の在り方に関する一考察—」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』21,31-46.

中澤明子・福山佑樹(2015)「アクティブラーニン

グを授業に導入するための支援体制：日本とカナダにおける事例からの検討』『医療看護研究』12(1), 1-7.

鈴木康夫 (2020) 「遠隔授業の実践と工夫」『大学の物理教育』26(3), 101-104.

時任隼平 (2017) 「アクティブラーニング型授業において受講生がスチューデント・アシスタントに求める能力に関する研究」『日本教育工学会論文誌』40(Suppl.), 169-172.

謝辞

本研究は、2022年度関西大学教育研究高度化促進費「オンデマンド型授業における講義映像制作支援モデルの構築」(岩崎千晶代表)からの支援を受けた。